Vistas

KOBE COLLEGE NEWSLETTER

"Beauty Becomes a College"

41

2022•June

◉Published by KOBE COLLEGE

神戸女学院大学

「知らない世界を、知っている世界に変えていく。」

◉神戸女学院大学のキャリアサポート

山田 義憲 さん(キャリアセンター課長)

森 真理絵 さん(キャリアセンター職員)

「教育」という営みを哲学する──5
自分と世界が変わるアプローチ
バトラー研究から女性学への広がり
文学部 総合文化学科　奥野 佐矢子 教授

ウィーンの劇場に響かせるヴィオラの音色──9
──クラシックの都で演奏できる悦びを胸に──
ウィーン・フォルクスオーパー交響楽団員　秋田 紗奈江 さん

学生と地域を結ぶ、架け橋になる──11
地域創りリーダー養成プログラム

国際理解や社会貢献にも繋がる映画字幕制作プロジェクト──13
大阪アジアン映画祭にて上映

人との関わりを通して多様性に触れる──14
ボランティア活動の奨励賞をW受賞！

KCトピックス──15

「知らない世界を、知っている世界に変えていく。」
神戸女学院大学のキャリアサポート

関西の私立大学・女子大学のなかでも、とくに高い就職率を誇る神戸女学院大学。就職活動に大きな影響を及ぼしたコロナ禍であっても、例年とほとんど変わらない就職率をキープしており、有名企業からの採用も多い。こうした結果は、どのようなキャリア支援から導かれるものなのだろうか。キャリアセンター課長の山田さんと、職員の森さんに話を聞いた。

●キャリアセンター課長
山田 義憲 さん
●キャリアセンター職員
森 真理絵 さん

■1年間を通してステップアップしていく

——就職活動への支援として、キャリアセンターではどんなことを行っているのでしょうか？

山田　個別の面談などももちろん行っているのですが、中心となっているのは1年を通して構成しているキャリアサポートプログラムの実施です。年間およそ130回ものセミナーを行っていて、中身は大きく分けて2つ。ひとつは、就職活動に必要なテクニックを身につけるための支援で、自己PR作成や面接対策などがこれにあたります。もうひとつは、学生が企業、業界や自分自身を知るための支援。こちらは学生の選択肢を広げてもらうことを目的に行っているもので、私たちは「知らない世界を、知っている世界に変えていく。」ものであると捉えています。

森　一歩ずつ階段を登りながら、1年を通して対策していくというイメージですね。最初は何も知らなくても、順番にセミナーを受けていくなかで少しずつ知識が身につき、視野が広がり、充実した就職活動を行えるように組み立てています。

■将来の選択肢を、自分で狭めないでほしい

——「知らない世界を、知っている世界に変えていく。」支援について、詳しく聞かせてください。

山田　学生の間は、仕事や企業について知っている範囲が非常に限られていると思うんですね。知っている企業を聞いてみても、20～30も挙げられないとても狭い世界しか知らないのに、その中から就職先を見つけようとしているんです。でも知らない世界を少しでも知っている世界へと変えていけば、そのぶん視野が広がって選択肢を多く持てるようになり、幸せになれるチャンスも増えていきます。そのためキャリアセンターでは、学生が「自分にもっとも適している」と思える企業に出会う機会の創出に力を入れているんです。

森　社会はいろんな会社や団体、機関などが相互に関係し合うことで成り立っているんですよね。まずはそこに気づいてもらうことが大事。いわゆる株式会社に就職する以外にも、独立行政法人や公務員という選択肢もあります。自分にはたくさんの選択肢があるということを知ってほしいです。

——具体的には、どういった支援があるのでしょうか？

山田　ひとつは「おすすめ求人」の紹介です。キャリアセンターには毎年、たくさんの企業や団体から求人票が届きます。そのひとつひとつに、女学院の学生の特性や志望業界を熟知したキャリアセンター職員がしっかりと目を通し、よりすぐりのものをピックアップ。おすすめ求人として、キャリアセンターが発行するメールマガジンなどで紹介しています。求人のなかには、企業の採用ページや就職ナビには掲載されておらず、限られた大学に直接依頼されるものもあるんですね。こうした取り組みによって、学生と企業との数多くのマッチングを成功させてきました。

——そこまできめ細かな就職支援を行っているんですね。

森　学生自らの意思で「社会人としての第一歩を、この会社から踏み出したい」と、後悔なく選んでもらいたいというのが私たちの願いです。そのために、学生とのコミュニケーションも大切にしています。

■100社以上が参加する企業研究セミナー

——1年次から参加できるプログラムが充実しているのも、就職活動を通して幅広い世界を知ってほしいという思いからでしょうか？

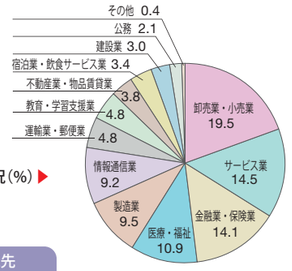
山田　そうなんです。代表的なのが、業界、企業、仕事について幅広く知ることを目的とした「KCキャリアフォーラム」。さまざまな業界について、国内最大手の信用調査会社出身の講師が最新のトレンドも盛り込みながら楽しく・わかりやすく解説する「業界探究セミナー」や、企業の採用担当者をお招きして仕事内容ややりがいなどについて講演していただく「仕事発見セミナー」などのプログラムを用意しています。

なかでもキャリアセンター最大のイベントが、毎年2月に開催する「企業研究セミナー」。このセミナーでは100社以上の企業の採用担当者が来校し、基本的な企業情報や実情、業界の動向などについてお話してくださいます。昨年と一昨年はリモート開催となりましたが、それでも多くの(※)学生が参加してくれました。多様な業種・規模の企業のなかから、自分に合った

〈2022年3月卒〉 ◉就職率 98.8%
（就職者476名／就職希望者482名）

	卒業者数	就職希望者数	就職者数	就職率
英文	153	132	131	99.2%
総合文化	219	190	187	98.4%
音楽	23	11	11	100%
心理・行動	105	83	82	98.8%
環境・バイオサイエンス	83	66	65	98.5%
合計	583	482	476	98.8%

2022年3月卒 業種別状況（%）▶



2022年3月卒 主な就職先

企業名	
一条工務店	三菱UFJ銀行
積水ハウス	三井住友信託銀行
大和ハウス工業	住友生命保険
オムロン	日本生命保険
杏林製薬	明治安田生命保険
小岩井乳業	野村證券
住友電気工業	阪急阪神ビルマネジメント
TASAKI	三井不動産リアルティ
東芝エレベータ	三菱UFJ不動産販売
NHK高松放送局	パレスホテル
宮城テレビ放送	星野リゾート
T&D情報システム	社会保険診療報酬支払基金
AIRDO	日本年金機構
NX・NPロジスティクス	日本赤十字社兵庫県支部
住友倉庫	NTTファシリティーズ
日本通運	セコム
三井倉庫ホールディングス	厚生労働省 兵庫労働局
住友商事マシネックス	国土交通省 近畿地方整備局
トラスコ中山	防衛省 航空自衛隊
三菱食品	大阪府
リコージャパン	和歌山県

▼Column

学生を孤独にしない、コロナ禍での取り組み

新型コロナウイルスの感染拡大は、就職活動にも大きな影響を及ぼしている。しかしキャリアセンターでは、いち早くオンラインの相談窓口を設置。学生が孤立しないよう、どんなことでも相談できる体制を整えたところ、連日のように満席となった。さらに2020年度にはオンラインでの面接を行う企業が多かったことから、オンライン映えに特化した個別アドバイスもスタート。カメラのどの部分を見るのかということから、光の入り方、声のトーンなど、細かい部分まで指導することで、自信をもって面接に臨めるよう後押しした。神戸女学院大学の掲げる「Student First」の精神が、キャリアセンターのこうした動きの早さにも現れているといえるだろう。

ところを見つけられる貴重なチャンスで、このセミナーに参加したことで知った企業に就職する学生も、毎年たくさんいます。

森　キャリアセンターでは卒業生を多数採用してくださった企業を中心に、強い関係性を築くことにも長年力を入れてきました。企業研究セミナーにも、そうした企業が「ぜひまた神戸女学院大学の学生を採用したい」という思いで参加してくださっているので、企業・学生の双方にとってとてもいい出会いの場になっていると感じます。

そのためより多くの学生に参加してもらえるように、キャリアセンターでは企業研究セミナーに参加する企業を具体的に紹介する「お勧め企業紹介セミナー」も開催。学生の参加意欲を高める取り組みを行っています。加えて「ゼミ訪問」も行い、企業研究セミナーには必ず参加するようにと、口を酸っぱくして言っているんです。そうした取り組みもあり、多くの学生が企業研究セミナーに参加してくれています。

（※）「企業研究セミナー」実績
●2020年度……8日間実施（105社が参加）、学生は延べ6273名が参加
●2021年度……9日間実施（100社が参加）、学生は延べ4437名が参加

■神戸女学院ならではのゼミ訪問と全員面談

――ゼミ訪問とは？

森　3年生の9月頃からひとつずつゼミを回って、就職活動のポイントを凝縮してお話しています。ゼミの人数って多くても15人くらいなので、フェイス・トゥ・フェイスでしっかり伝えられるんですよね。大人数の講座だと自分ごととして捉えられない学生も、間近で話すと「やらなきゃ」と思ってくれるようです。それに私のほうにも、学生の熱量が伝わってきて。一生懸命メモを取っている姿を見ると、「将来について不安を抱えながらも、真剣に考えようとしているんだな」と実感します。

山田　ゼミ訪問は森さんが中心になって行っているんですが、親しみのある優しい口調でわかりやすく説明してくれていることもあり、学生の心に大きく響いていると思います。少人数制教育を行っている女学院だからこそできる取り組みですよね。ゼミ訪問のあとで、キャリアセンターに足を運んでくれる学生も多いです。

森　なぜか「キャリアセンターは怖い場所」と思われていますからね（笑）。学生の多くは就職活動を特別なことだと感じていて、「正解」があると考えているようなんです。だから「キャリアセンターに行ったら怒られる」と思うのかもしれません。でも就職活動って本来は自分の人生をデザインする作業であって、「こうしなければならない」というルールはないんですよ。100人いたら、100通りの就活があっていい。勘違いで自分の選択肢を狭めてしまうのはすごくもったいないので、その思い込みをできるだけ取り払いたいと思っています。

山田　女学院の特徴的な取り組みというと、3年生の後期に行う全員面談もありますね。これは自己分析をサポートするもので、事前にワークシートを書いてきてもらい、それをもとにカウンセラーと1対1で話をするんです。学生時代にがんばってきたことや、自分の長所・短所、仕事に求めることなど、ひとつひとつ棚卸ししながら整理していきます。

森　就職活動では、エントリーシートの書き方や面接の受け答えの仕方といったテクニックを身につけることも大切なのですが、すべての土台になるのは自己分析なんですよね。そこをしっかり深められていると、就職活動は充実したものになっていきます。ただ、自分のことって自分ではわからないので。とくに女学院の学生は素直で謙虚なので、すごくがんばってきたことでも当たり前のことだと思っていたりするんですよ。だから私たちが「それはすばらしいことなんだよ」と伝えてあげるようにしています。

山田　自分を知るための自己分析も、「知らない世界を、知っている世界に変えていく。」ためのステップのひとつだといえますね。

■幸せな第一歩を踏み出すために

――2021年12月に大学通信が発表した「有名企業400社 実就職率ランキング」では、神戸女学院大学が関西を含む西日本の私立女子大学で1位にランクインしました。この結果については、どうお考えですか？

山田　学生自身が業界・企業研究と自己分析をしっかり行い、どんな企業だったら自分が貢献できるのかということを見据えて選んだ結果だと思っています。また400社のなかには、企業研究セミナーに参加してくださっているところもあるんですね。卒業生が大いに活躍し、信頼されているおかげで、多くの企業に「ぜひまた神戸女学院大学の学生を採用したい」と考えていただいているというのも、要因のひとつだと考えています。

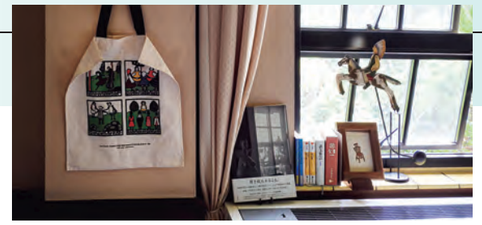
ただ、なかには「大企業よりもアットホームな中小企業のほうが自分に向いている」という学生もいるんですよ。それはそれでいいと思っています。大切なのはたくさんの企業や団体などを見たうえで世界を知り、自分にマッチする就職先を見つけることなので。だからこそ、企業研究と自己分析は必ず両輪で行わなければならないと考えています。

森　内定がゴールではなくて、社会でどんなふうに生きていきたいかを考えるのが就職活動なんですよね。今の時代、ひとつの会社に定年まで勤め続けるのというのもスタンダードな生き方ではないですし、就職後にも自分の人生を考えるタイミングは何度もやってくるはずです。そのときにきっと必要になるのが、広い視野を持つことと、自分から世界を知ろうとすること。その力を、今のうちにつけてもらえたらいいなと思っています。私たちに教えられることは教えるし、全力でサポートもするので。

山田　本当にその通りで、就職活動の目的は入社することではなく、幸せなキャリア人生の第一歩を踏み出すことなんですよね。自分らしく生き生きと、社会に貢献できるようになってほしい。私たちはそのためにサポートしていますし、その結果が数字としてもあらわれているんだと思います。

2021年有名企業400社実就職率ランキング
（西日本の私立女子大学でのランキング）出典：大学通信

順位	大学名
1位	神戸女学院大学
2位	同志社女子大学
3位	京都女子大学
4位	神戸松蔭女子学院大学
5位	京都ノートルダム女子大学
6位	武庫川女子大学



●バトラー研究から女性学への広がり

現代フェミニズム思想を代表する哲学者であるジュディス・バトラーの議論に依拠しながら、人間形成のプロセスについて研究を続けている奥野佐矢子教授。女性学・フェミニズムとは意識的に距離を置いていたのが、女学院に赴任してからは考え方に変化があったという。その研究の変遷とあわせて、不安な時代に生きる学生たちに伝えたいことを語ってもらった。

自分と世界が変わるアプローチ
「教育」という営みを哲学する

●文学部 総合文化学科
奥野 佐矢子 教授―― *OKUNO Sayako*

◉教育哲学について

――奥野先生のご専門分野である「教育哲学」とは、どういった学問なのでしょうか？

ひとことで言えば、「どう教えるか」の前提にある、教育そのもののイメージ自体を批判的にみる学問です。私たちの教育のイメージはなんらかの働きかけや手段を使って、人をよく変えていく、でしょう。そして、効果的な教え方や、教えることによって人をどのように変えていくのかといったことを考えていきます。でも、人が人を変えるというのは、ある意味でとても傲慢なことでもあるんですね。たとえば子どもをこういうふうに伸ばしたいと思う。そうした願いは理解できますが、進む方向を最初から決めて子どもに働きかけ、それ以外の選択肢を許さないとすれば、それは暴力にもなりえます。そうした教育の営みを、どこかで反省しなければならないと思うんです。

教育哲学というのは、教育の営みから少し距離を取って、反省する学問です。よく「教育哲学をやっても教育は何もよくならない」といわれるんですが(笑)、確かに、一理あるかもしれない。なぜなら、その「よくしよう」という姿勢そのものさえ、教育哲学の反省の対象になるからです。

「教育が問題だ」といった場合、その問題をどうにかしようとするのではなく、そもそもその問題が、なぜ・どう起こっているのだろうという問いを立てることで、問題そのものの見え方が変わっていく。教育哲学ではそんなアプローチをとります。知る前と後とでは見えている世界がちょっと変わるし、その世界を見ているあなたも少し変わる。対象を変えるというよりは、世界と自分が変わる学問だと思っています。

――先生のゼミには、やはり教員をめざす学生が多いのでしょうか？

実は、教職課程を取っている学生さんはあまり多くありません。教育というのは、学校だけで起こることではないんですね。教育を、人が学び、育ち、変わる「人間形成」と読み替えれば、本を読むことでも、映画を観ることでも、友達・親子関係でも、男女や老い、あるいは死からでも、人生のあらゆる局面で学びは起動します。教育という事象、言い換えれば人が変わる・育つといったことに関心を持っているのなら、ここで一緒に勉強しようよと言っています。

――そうなると、学生の関心は多岐にわたりそうですね。

バラバラですね、だから指導がものすごく大変で(笑)。たとえば過去には「ディズニーランドが大好きだから、それについて書きたいんです」という学生さんがいました。彼女に伝えたのは「本当に愛しているなら、裏側も見なさい」ということ。いいところだけを見て好きだと思うのは単なる憧れであって、ちゃんと見たことにはなりません。影の部分からも目を背けずにいるのが愛だと思うんですね。

結果的に彼女はしっかり影の部分までリサーチしてくれて、雇用環境についてまとめた「夢の国ディズニーランドの現実」という卒業論文を書き上げました。

――学生自身の興味や好奇心から、卒業論文のテーマが立ち上がってくるんですね。

奥野ゼミではそうしています。ただ、テーマ探しは言い換えれば「言葉探し」だと思っていて、ちょっとコツがあるんです。

たとえば「子どもに関心があります」といってゼミに入ってきてくれる学生さんたちは沢山おられますが、その「子ども」という言葉に託された思いは一人一人違います。その違いが、最終的に子ども食堂や、ヤングケアラー、戦時下の絵本といった多彩な卒論テーマに行き着く鍵となるのです。卒業論文を書くには、大きな言葉を深掘りして、もっと解像度の高い言葉に変換していく必要がある。そのお手伝いをするのが、私の仕事だと思っています。

◉フェミニズム研究について

――先生は女性学・フェミニズム研究の分野でも論文を発表されています。そちらについてもお聞かせください。

もともと私は「女性」というテーマを、自分の研究の核としては打ち出してきませんでした。教育哲学は、教育という営みを哲学する研究分野と自認しています。そして哲学であるからには、一般的・普遍的なものを扱うというポリシーがあるわけですね。それに対して女性というテーマは、個別具体的な一事例という扱いで、教育哲学というジャンルにおいてはどうしてもメインストリームから外れてしまうんです。

私が教育哲学会で最初に認められた論文は、ジュディス・バトラーという哲学者の議論を、人間形成論に落とし込むというものでした。女性ではなく、人一般がつくられていくプロセスを扱ったんです。

▲ 奥野 佐矢子「“ポスト” フェミニズムと教育学の交叉―『ジェンダー・トラブル』以降のフェミニズムが問いかけるもの―」『近代教育フォーラム』（教育思想史学会、第25号、2016年）

バトラー自身は、大学で哲学を学んだ後フルブライトでドイツ留学も経験し、博士論文のテーマはヘーゲル研究という、哲学の本流のトレーニングを受けたひとです。そうでありながらご本人は性的マイノリティで、ユダヤ人という文化的背景を背負い、アイデンティティ形成においてさまざまな苦難を抱えてきている。著作『ジェンダー・トラブル』は、彼女自身のそのような思いと、透徹した哲学的思考とが凝縮されたバトラーの代表作で、世界的に評価されています。

そうした来歴をもつバトラーの言葉にはパワーがあって、女性という性的アイデンティティを持つ私自身、読んでいて励まされ、共鳴することが沢山ありました。ただ、それをそのまま押し出して、学問の世界で「フェミニズム研究」を自認することには研究者としてためらいがありました。自分が背負う女性という属性と、フェミニズム研究とをストレートに結びつけすぎると、研究の幅を狭めてしまうのではと懸念したのです。それで、このテーマからは意識的に距離を置いていたのですが、女学院に来てから、そういったことも私の仕事の一部なんだと受け入れられるようになったんです。

――どのようなきっかけでフェミニズム研究にも取り組まれるようになったのでしょうか？

女学院には２０１４年から奉職するようになったのですが、その前任校にいたときから、少しずつそうしたことを考える準備ができていたのかもしれません。

女学院の採用面接で「どうして女学院にアプライしようと思ったのですか？」と聞かれたんですね。それまであまり考えたことはなかったんですけど、前任校で抱えていた思いをお話しました。

前任校では、中国地方のとある大学の経済学部にいました。学生の３分の２ほどは男性で、残り３分の１が女性。その女性たちがすごく優秀だったんですね。経済学部に来るくらいだから、将来のことをしっかり考えていて、自立しようという意志もあるのに、就活のときには悩んでいる子がとても多かったんです。「実家に帰っておいで」と言われたり、「僕の就職先が決まったらついてくるんだよね？」と言われたり。彼女たちが「先生どうしたらいいでしょう？」と相談にくるたびに、こんなにポテンシャルのある子たちがこんな悩みを抱えているんだと感じていました。

彼女たちだけが背負って、彼女たちだけが悩む問題っていうのがある。でも、そうした問題に突き当たって、悩み、時に乗り越えたり、あるいはやり過ごしたりする経験こそが、生きる可能性につながります。

女学院でなら、そんな可能性にもっと立ち会える。思い返すとそれが、ぼんやりと抱いていた気持ちが初めて形になった瞬間だった気がします。

――そこから研究の方向性が変わったのでしょうか？

すぐに変わったわけではなく、女学院に着任した翌年の２０１５年に、ある学会のシンポジウムに呼んでいただいたのが大きな転機になりました。そこで、先ほどお話したジュディス・バトラーとフェミニズム、そして教育学の関係を、はっきり語ってほしいと依頼されて。それまでジェンダーについてはあまり考えたことがありませんでしたが、バトラーについて研究していたことをもう少し広げるという形であればなんとかやれるのではないかと思い、お引き受けしました。

そしてその発表内容をまとめた論文が、２０１６年の学会誌に掲載され、評価していただけたんです。「奥野さんはバトラーをやっていたけど、こういう批評的な語りもできるんだ」と認めていただけて、女性学やジェンダーといったお仕事がやってくるようになりました。

――依頼を受けたことが、大きなきっかけになったんですね。

そうなんです。私は「自分はこうだから」と最初から決めるのではなく、人から振られたお仕事に精一杯応えようとするなかで「あ、こんなこともできるんだ」と自覚することが多いみたいです。縁とお声がけで、この場所まで引っ張ってこられたというか。自然な流れで、今ここにいるという感じはとてもあります。

――今後の研究については、どういったことに関心をお持ちですか？

女学院に来て研究の幅がすごく広がったし、たくさんのお仕事をさせていただいているんですけど、もう一度ジュディス・バトラーの研究でやりたいテーマがあります。バトラーについてはすでに、まとまった研究がたくさんあるんですけど、教育哲学をやっている者として、しっかり分析しなければならないことがあると思っていて。

やっぱり原点や原著に戻ることって、すごく大切。改めてインプットとアップデートをしていかなければならないと考えています。

◉学生さんに伝えたいことは

――学生のみなさんに伝えたいことをお聞かせください。

女学院の学生さんって、みんなとてもいい子なんです。みんな何者かになろうと頑張っていて、とても焦っていて。入学して間もないときから、いつも何かを心配しているように見えるんですよね。そんな彼女たちを見ていると、「君たちは今のままで全然いいから！」と言いたくなるんです。

女性の人生って山と谷だらけで、全然ストレートにはいきません。結婚・出産を選択しなかったとしても人生の転機はいっぱいあって、その度に選択し、覚悟を決めていかざるを得ない。でも、選択したその先でいつか新しい扉が開きますし、人生はなんとかなるものだから、不安におびえすぎないで。今のままで十分素敵なんだから、もっと安心していいよと伝えたいです。

――今の自分のままではダメで、よりよい何かになろうとする指向性があるのでしょうか。

そうですね、それはこの国の教育制度や教育学の言説が、常に前に進むのを「よきこと」として、人を駆り立ててきた罪なのかもしれません。

でも人は前進するだけでなく、降りるときもありますよね。人生のどこかの時点で、引きこもるなど社会から距離を置くケースもありますし、更年期であるとか、老いによる体の衰えなどで、これまで通りの生産性を上げられない自分に戸惑うこともあります。そうしたことと「折り合っていく」ための作法や眼差しが、これからの社会には求められていくのではと予感しています。多様な生をそのままに「在る」というあり方を、もっと探っていきたいですね。

今、私のゼミには「老いの人間形成について卒業論文を書きたい」という学生さんがいるんです。学生さんたちが「降りていく生き方」について問題を先取りしようとしている姿勢には、希望を感じています。

――最後に、学生におすすめの本がありましたら教えてください。

私は研究者で、論文という形式で自己表現しますが、詩や文芸、批評の言葉にはいつも触発され、ヒントをもらっています。なかでも好きな詩人のひとりが、長田弘。『深呼吸の必要』（晶文社、初版１９８４年、２０２１年再版。文庫版もあり）という本は、学生のみなさんにぜひ一度手に取っていただきたいと思います。

とくに冒頭に置かれている「あのときかもしれない」という詩が、おとなになる瞬間を鮮やかに切り取っていて秀逸なんですね。この作品がそっくり、教育哲学で扱うべき「人間形成」のすがたを指し示しているように思います。

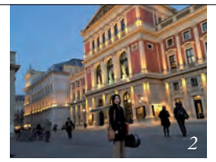
大きな言葉を深掘りして、
もっと解像度の高い言葉に変換していく必要がある。
そのお手伝いをするのが、私の仕事だと思っています。

■**奥野佐矢子**（おくの・さやこ）
神戸女学院中学部・高等学部出身。広島大学大学院教育学研究科教育科学専攻博士課程後期単位取得退学。下関市立大学経済学部准教授を経て、2014年より文学部総合文化学科准教授、2021年より現職。専門は教育学、人間形成論。著書に『ダイバーシティ時代の教育の原理―多様性と新たなるつながりの地平へ―』（共著、学文社、2018年）、『教育的関係の解釈学』（共著、東信堂、2019年）、「『狐たちの言葉』がひらくもの」『早稲田文学』（早稲田文学編集室編、2020年夏号）、『日常を拓く知 古典を読む 第5巻うつくしさ』（編著、世界思想社、2021年）などがある。

▲総合文化学科が監修する多彩なテキストに寄稿するほか、最新刊『うつくしさ』（世界思想社、2021年）では編著者をつとめた

© Michael Williams

1


2

3

Echoes in the Vienna Theatre The sound of the viola

ウィーンの劇場に響かせる ヴィオラの音色

クラシックの都で演奏できる悦びを胸に

●ウィーン・フォルクスオーパー交響楽団員
秋田 紗奈江 さん―― *AKITA Sanae*

その深く味わいある音色から、人の声にもっとも近い音を奏でる楽器として知られるヴィオラ。秋田さんはその癒される音色に惹かれてヴァイオリンから転向、現在はクラシックの本場の一つであるオーストリア・ウィーンに在る劇場のオーケストラ団員としてヴィオラを演奏している。

© Michael Williams

■**秋田紗奈江**（あきた・さなえ）
2012年3月、音楽学部音楽学科器楽専攻ヴァイオリン卒業。Second Majorヴィオラ修了。ウィーン市立音楽芸術大学修士課程ヴィオラ専攻卒業。ウィーン放送交響楽団アカデミー生を経て、2019年よりウィーン・フォルクスオーパー交響楽団の団員として活動を続けている。

オンラインで行われた取材の様子▶

◆心地よい音色をもつヴィオラとの出会い

「演奏をする時には、その公演にしか来られないお客さんのためにも、一生懸命弾くのがモットーです。毎日弾いていると忘れそうになりますが、常に新鮮さを忘れずにいたい」。現在、オーストリア・ウィーン9区にある歌劇場〝ウィーン・フォルクスオーパー〟付属交響楽団のヴィオラ正規団員として活躍している秋田さん。

ヴァイオリンを始めたのは5歳。幼い頃から師事していた先生が立ち上げメンバーだった〝明石フィルハーモニー管弦楽団〟に参加して、音楽の道へ進むことを決意したのは高校生の時だ。「オーケストラは、なんといっても大人数で弾けるのが楽しかった。音の重なりを感じられるのはオーケストラならではの醍醐味だと思います」。

音楽学部にはヴァイオリン専攻で入学。器楽Minor（副科）でヴィオラとの出会いを果たした秋田さんは、その魅力にはまった。譜面や奏法もヴァイオリンとは異なるため敬遠する同級生が多いなか、体に響く柔らかい低音に心地よさを感じたという。「ヴァイオリンは技術的に弾けない、という辛い思いも多かった。けれどヴィオラを弾いている時は技術面より音楽面に集中して弾けたこともあって、楽しさばかりでした」。

4年生時には、ウィーン夏期国際アカデミーに参加。わずか2週間ながら、日本で重視される演奏技術よりも音色や音楽に対する感性を重視するレッスンに大きな感銘を受けた。先生から「もっと勉強したければ、ウィーンにおいで」との言葉をもらい、留学を決意。卒業翌年にウィーン市立音楽芸術大学の試験に合格し、修士課程の2年という期限付きでウィーンへ旅立った。

◆何もかもが違ったウィーンでの暮らし

現地では語学学校にも通ったが、オーストリア訛りのドイツ語に苦戦。あわせて日本とは大きく異なるウィーンの街にも気分は滅入るばかり。「今はその良さもわかるようになりましたが、当初はなかなか街の静かさに慣れなくて。街の規模も小さいし、日曜はお店が全部閉まってしまう。冬は毎日天気が悪くて空が暗い……日本とは違うことばかりでした」。

暗い気持ちを振り切るように、ヴィオラのレッスンに没頭。夢中でヴィオラを弾き続け修了試験を終えたのは2年半後のことだ。当初はそのまま帰国の予定だったが、ウィーン放送交響楽団のアカデミー生オーディションが開催されることを知り、受けてみることにした。最大3年半団員として演奏できるアカデミー生制度とはいえ、各楽器グループに用意される2席が空かなければ新規募集もない。

絶好のタイミングだったそのオーディションには約20名が招待されたが、みごとその席を勝ち取ったのは秋田さんだった。「先生は『1回で受かるなんて、すごい！』と、とても喜んでくれました。逆に両親は『あ～そうか～』と、あまりにも反応が鈍かったので『難しいんだよ！ 入るの！』と、こちらから言いました（笑）」。

4

モーツァルトの『魔笛』、シュトラウスの『こうもり』……
数々の名曲を演奏できることの楽しさを、いま実感しています。
新しいレパートリーに出会えることは嬉しいですし、
オーケストラでいろんな曲に挑戦できる毎日にやりがいを感じます。

◆自分を変えたオーケストラでの演奏

ウィーン放送交響楽団では有名なソリストや指揮者を迎え、ザルツブルク音楽祭でも演奏できたほか、フリードリヒ・チェルハをはじめ現代音楽を演奏するなど、今までにない経験をたくさん積めたという。

さらに秋田さんの演奏にも大きな変化が。「それまではどうしても間違えず正確に弾くことに気を取られていましたが、ここでは『間違えてもいいから弾きなさい』と。周りにこそこそ合わせるのではなく、ここだ！ と思ったら飛び出してもいいから弾く。最初は怖かったけれど、徐々に思い切って自分の感覚で弾けるようになりました」。

やがて3年半の期限を迎える頃に、秋田さんは将来を考え始めた。「帰国しても日本のオーケストラに入れるだろうか？ と悩んでいた時に、団員や先生からこちらのオーディションを受けてみたら？ と勧められました」。放送交響楽団、ウィーン交響楽団、と積極的に挑戦し続けた結果、遂にフォルクスオーパー交響楽団のオーディションに合格。それは、ちょうどアカデミー生期間が終了する頃だった。

◆〝目の前にあること〟に真摯に向き合う

ウィーン・フォルクスオーパーといえば、ウィーンでは国立歌劇場に次いで2番目に大きな歌劇場。オペラやオペレッタ、ミュージカル、バレエなど演目も幅広い。今まで以上にレパートリーも多く、必然的に楽譜も圧倒的な枚数に増えた。毎日公演があるのも初めての体験で、コンディションを整えるのにも苦労したという。

その反面、やりがいも大きい。「モーツァルトの『魔笛』、シュトラウスの『こうもり』といった有名曲を本場で演奏できることは本当に嬉しく思ってます。また、毎シーズンたくさんの新しいレパートリーに出会い、挑戦できるのも今の楽しみの一つです」。

入団して約2年半。着実にキャリアを重ね、今ではヴィオラグループのシフトを組んだり、次席に座ることもあるなど、仲間から信頼される団員のひとりとして成長した。

秋田さんのモットーは、〝目の前にあることを頑張る〟とシンプルだ。演奏でもシフト作成でも、自分のやるべきことをきちんと見据えて向き合うのが信条。どんなことでも、常に成長しよう、よくなろうと努力し続けることが大事だと考えているそう。そのために今後もドイツ語の勉強は継続し、室内楽の演奏などにも一層取り組みたいと意欲的だ。「目の前のことにしっかり取り組み、ちゃんと学ぶこと。それをきちんと続けていれば、また新しいことに挑戦する機会が、きっと巡ってくるのではないかと思っています」。

5

6

7

8

▲毎年開催されているフォルクスオーパーの日本公演のチラシ。
残念ながらコロナ禍により昨年に引き続き今年も中止となった

1 ウィーン市立音楽芸術大学の前にて（2015年）／2 ウィーン楽友協会の前で（2015年）／3 国際原子力機関（IAEA）の舞踏会に参加（2016年 ウィーン・ホーフブルク王宮）4 秋田さんお気に入りのドナウ川沿いの散歩道／5 杉山雄一先生と（神戸女学院大学卒業アルバムより）／6 ウィーン夏期国際ゼミナールにてヘルベルト・ミュラー先生のレッスン／7 ウィーン放送交響楽団の定期公演（2017年 ウィーン楽友協会にて）／8 ウィーンフォルクスオーパーのオーケストラピットで同僚と（2019年 大晦日）

特色プログラム

◉地域創りリーダー養成プログラム 門戸班

学生と地域を結ぶ、架け橋になる

「地域創りリーダー養成プログラム」は、2年生後期から4年生前期までの2年間で企画力や実行力を磨く、神戸女学院大学独自の実践型科目。ゲスト講師による講義で地域の課題や取り組みを理解し、そのうえで実際に学生が地域の方々と連携しながら、さまざまなイベントを企画・実施する。活動内容によって班が分かれているが、今回は14期生門戸班にインタビュー。指導者である吉益教授にも、活動と学びについて話を聞いた。

- 人間科学部 心理・行動科学科――吉益 光一 教授
- 文学部 英文学科 3年生――Yさん
- 文学部 英文学科 3年生――Oさん
- 人間科学部 心理・行動科学科 3年生――Kさん

吉益光一教授に聞く

▼コロナ禍の制約があるなかでもコンセプトを実現できた

――地域創りリーダー養成プログラムの、門戸班の活動内容を教えてください。

門戸班では学校周辺のウォーキングマップの作成と、地域の飲食店とのコラボ商品の開発に取り組みました。「門戸班」という名前ではあるのですが、ウォーキングマップは甲東園のあたりまで、幅広くカバーしています。夏休みを利用して、暑い中、数人ずつのグループで歩き回りながら制作してくれました。

コラボ商品のほうはランチボックスの内容を飲食店と一緒に考案したほか、西宮市に本社のある株式会社ザザエ食品さんと、梅スイーツの開発にも取り組んでいます。これは梅酒「こういうめ」を漬けたあとの梅を再利用したお菓子を作るというプロジェクトで、環境・バイオサイエンス学科の野寄玲児教授が担当された2代前の門戸班から取り組んできました。商品化にまで至ったのは、このグループが初めてです。

▼収穫した梅の下ごしらえの様子

――コロナ禍の影響はありましたか？

コラボ商品は毎年10月に開催される大学祭と愛校バザーで大々的に販売する予定だったのですが、両方とも中止になってしまったのは大きかったです。せっかく商品化した梅スイーツを出せなかったのは、とても残念でした。ただ、ランチボックスや各店のおすすめ商品を学内で販売したところ、たいへん好評で。学生としては、制約のあるなかで最大限努力をしてくれたと思います。

――地域の方からの反応は？

やはりたいへん喜ばれました。今期の門戸班は、あまり触れ合いのなかった学生と地域を結ぶ架け橋になるというコンセプトをしっかり持っていたので、そこがしっかり実現できていたのではないかと感じています。

――このプログラムを通して、学生に学んでほしいことは？

企画力と実行力、あとはチームで動くときの心構えですね。職場はもちろんですが、地域の自治会や保護者会など、今後生きていくうえでいろんなところで役に立つ力ではないかと思います。今期の門戸班の学生は最初からモチベーションが高く、そうした力も十分に発揮してくれました。

門戸厄神地域
Walking Map

「もっとモンド祭」では各店のランチボックスやおすすめの商品を販売▶

▲すっきりと整理されているイベント開催時用の備品や衣裳

▼指導スタッフの方と門戸班のメンバーたち

参加学生に聞く

▼企画・実行をすることで身につけられた力

――授業を振り返って、とくに印象に残っていることは？

Kさん 地域の方と長く関わっていくなかで、仲良くなれたのがうれしかったです。ウォーキングマップを渡しに行ったときに「いつもSNS見てるよ」と、あたたかい言葉をかけてくださったり。私たちも「地域の一員」と言ってくださったことが、何より印象に残っています。

Yさん 私はコラボレーションした商品やお弁当などを、学内で販売したことです。告知に力を入れた甲斐があって、3回販売したのですが30分～1時間ほどで完売することも。その反響の大きさがうれしかったですね。お店の方も、とても喜んでくださいました。

Oさん 私はこの授業での活動を、オープンキャンパスで高校生に説明したことが印象に残っています。ウォーキングマップを配ったり、作成したポスターについて説明したりして、興味をもってもらうことができました。

▲オープンキャンパスで活動内容を説明

――大変だったことはありましたか？

Oさん コラボレーション商品の梅スイーツを作るために、梅の実の収穫に参加したこと。学内の梅を1日で25kgくらい収穫したのですが、すごくハードでした！

Kさん 私は、大きな目標にしていた大学祭と愛校バザーが中止になってしまったとき。そこでコラボ商品を販売するつもりだったので、企画を一から考え直さなければならず、チーム内での意思疎通も難しかったです。でも「学生と地域をつなぐ」という共通認識は揺らがなかったので、規模は小さくても学内で販売しようという方向に切り替えて進めていくことができました。

▲梅の実の収穫

・Oさん

▲好評だった「もっとモンド祭」

・Yさん

Yさん コミュニケーション能力が上がりました。そもそも初対面の人と話すことへの苦手意識を克服したかったので、自分から飲食店を担当させてもらったんです。緊張しながらも交流するなかでマナーが身につきましたし、伝えたいことを頭のなかでまとめておいてからお話しするということもできるようになりました。自分に足りていなかったところに気づけてよかったです。

Oさん 私はチームで課題を解決する力が身についたと感じています。メールやSNSを駆使して常に連絡を取り合いながら、どうすれば解決できるのかをみんなで考え、行動していました。学部学科の違うメンバーと一緒に活動するのもとても楽しかったですし、積極性も伸ばすことができたと思います。

Kさん 私は企画力です。イベントを成立させるためには、自分たちのやりたいことを詰め込むだけでなく、スケジュールを逆算してプロセスを組み立てていくことが不可欠なのだと実感しました。また企画を立てるにあたり、実際に地域の方の話を聞きに行くなかで、行動力も身についたと思います。

イベント企画の打ち合わせノート▶

・Kさん

Volunteer Activities

国内ボランティア奨励賞

大島初江記念賞

◉ボランティア活動の奨励賞をW受賞！

人との関わりを通して多様性に触れる

ボランティア活動に貢献した学生に贈られる「大島初枝記念賞」と「神戸女学院大学国内ボランティア奨励賞」。2021年11月16日に催された授与式では、総合文化学科2年生がダブルで受賞した。受賞の対象となったのは「東山アートスペース」と「ハワイ大学アウトリーチカレッジ 日本語カンバセーションパートナー」での活動。どのような思いで取り組んだのか、話を聞いた。（学年は取材当時）

●文学部 総合文化学科 2年生
（学年は取材当時）

――ボランティア活動を始めたきっかけは？

国際バカロレアディプロマ資格を取得できる高校に通っていたのですが、そのプログラムのなかでボランティアを行う機会があったんです。そのときあまり積極的になれなかったことを反省していて、大学生になったらまた挑戦したいと思っていました。そこで1年生のときからボランティア先を探し、見つけたのが京都の「東山アートスペース」です。

――東山アートスペースはどのような施設なのでしょうか？

▲「東山アートスペース」で利用者の方と（左：關さん）

▲「東山アートスペース」の活動チラシ

知的障害のある若者が表現活動をする施設です。精神保健福祉士の資格取得を目指していることもあり、障がいをもつ人たちと実際に交流してみたくて選びました。

この施設では芸術家がナビゲーターとなって、参加者が絵を描いたりものを作ったりします。私たちボランティアスタッフの役割は、制作の準備とサポート。発話のできない方、周囲に敏感で集中しにくい方、ひとりひとり違う対話が必要な中で、ユースワーカーの方、ナビゲーター、他のボランティアスタッフの接し方を見ながら、学ぶことができました。困ったことがあったら「助けてほしい」と素直に言ってくれる参加者の姿が印象に残っています。

――ハワイ大学アウトリーチカレッジ日本語カンバセーションパートナーの活動についても教えてください。

こちらの活動は、2年生の前期から始めました。きっかけは学内の国際交流センターでのネット掲示板で募集のチラシを見かけたこと。コロナ禍でなければ海外留学がしたかったので、その雰囲気だけでも味わえるかなと思って応募しました。

――どのような活動をしているのですか？

日本語を学んでいるハワイ大学の学生と、オンライン上で会話をします。基本は日本語ですが英語で質問されることもあり、英語での相槌や言い回しなどでもネイティブスピーカーから学ぶことは多いです。外国語を学ぶ人がどんなところでつまずくのかがわかると、自分の英語学習の振り返りや日本語に疑問を持つきっかけにもなります。

また、それぞれの文化についてもよく話すので、普段の生活でも文化の違いを意識するようになりました。ハワイについても、実際にそこで暮らす人を知ることで、親近感がわいて、ハワイに抱く想いがこれまでとは変わった気がしています。

――ボランティア活動をしていてよかったと思うことは？

たくさんの人と出会えることです。たとえば東山アートスペースでは、障がいを持ちながら明るく生きている方がいて、それを支える方々がいることを知りました。また日本の大学には同世代が集まっていますが、ハワイ大学は年齢層が幅広く、同じ大学生でもぜんぜん違うんです。日本でも、もっと多様な生き方・学び方があっていいのではないかと考えるようになりました。

――ボランティア活動を始めたい人へ、メッセージをお願いします。

私は芸術活動が好きなので、最初の活動場所として東山アートスペースを選びました。迷っている人は、まず自分の好きなことから始めるのがおすすめです。

◀ハワイ大学アウトリーチカレッジから贈呈された感謝状

国際理解や社会貢献にも繋がる

映画字幕制作プロジェクト

字幕制作の様子（2020年2月撮影）

◉大阪アジアン映画祭にて上映

毎年3月に開催される“大阪アジアン映画祭”。17回目を迎えた今年は、31の国と地域、計76作が上映され大盛況のうちに幕を閉じた。同映画祭で上映されるバングラデシュ映画の字幕制作に本学英文学科学生有志が取り組み始めたのは3年前のこと。初年に字幕を制作した映画は、今年全国ロードショーも決定した。“字幕制作プロジェクト”を指導する英文学科の先生方に話を聞く。

●文学部 英文学科
南出 和余 准教授

●文学部 英文学科
スーザン・ジョーンズ 准教授

●映画字幕という特殊な翻訳の難しさ

バングラデシュでフィールドワークを行う南出准教授の声がけで始まり、字幕翻訳専門家でもあるジョーンズ准教授の協力を得て、学生たちが〝字幕制作プロジェクト〟に挑戦するのも今年で三度目となる。「ITP（通訳・翻訳プログラム）の学生をはじめやる気あるメンバーが参加してくれているので、毎年とても活気溢れる作業になり私も嬉しく思っています」（南出准教授）。

映画1本の字幕制作にかけられる時間はたったの3日間。ストーリーの背景や字幕制作のプロセスといった内容を学んだ後、割り振られた5～7分を2人1組で担当する。難しいのは文字数の制限。字幕は俳優がセリフを話す時間しかスクリーンに出せないため、目で追える分量を考えセリフの秒数×4文字という字数制限がある。「英語を正確に日本語に訳した上でさらに短くしなければならないのは、通常の翻訳にはない大変な作業です」（ジョーンズ准教授）。

また登場人物の性格や背景をイメージした言葉選びも、映画の内容に合わせた方言や男性言葉と女性言葉の違いなど工夫が必要だ。「学生たちは日常的に使わない日本語を掘り起こすところにも難しさと同時にやりがいを感じるようですね」（南出准教授）。

英語字幕をもとに学生が日本語へ訳した字幕を、さらに南出准教授が最終チェックするなど短時間での作業は容易ではない。さらにコロナ禍の去年、今年はデータ管理を厳重に行いながらのオンライン作業という苦労もあったが、その頑張りの甲斐もあって問題なく上映を続けることができているという。

●学生時代の大きな糧となる貴重な体験

バングラデシュという国を深く知ることが国際理解に、映画祭に参加することは社会貢献に、など幅広い意義が生まれるこの活動。映画祭で上映された作品のエンドロールには字幕制作に参加した30人全員の名前が流れ、場内に沸き起こった温かい拍手に学生たちの達成感もひとしおだった。

さらに今年は嬉しいニュースも飛び込んだ。プロジェクト初年に字幕を制作した『メイド・イン・バングラデシュ』の全国ロードショーが決定したのだ。バングラデシュ人監督の作品が全国で公開されるのは日本初という記念すべき作品になり、プロジェクトにも大きな手応えとなった。

来年以降も本プロジェクトは続行予定。「映像字幕などメディア関係の翻訳はとても人気のある仕事ですが、通常の翻訳にプラスアルファのスキルが必要となる難しい仕事でもあります。学生の間に体験できる機会は貴重ですから、ぜひ参加してみてほしいですね」（ジョーンズ准教授）

『メイド・イン・バングラデシュ』のポスター（上）と大阪アジアン映画祭シンポジウムの様子（2020年3月）

KC TOPICS

2022年度入学式が行われました

4月4日(月)、満開の桜のもと、2022年度入学式が行われ、454名の新入生を迎えました※。

また、4月1日(金)・4月4日(月)・4月5日(火)の3日間にわたり、学生自治会主催の「クラブ・同好会紹介＆説明会 in 中庭」が開催され、多くの新入生が中庭を訪れました。

先輩たちのパフォーマンスを楽しんだり、新しい友人と言葉を交わしたり、キャンパスは多くの笑顔に溢れていました。

第139回卒業式が行われました

3月17日(木)、第139回卒業式が行われ、学部生583名・大学院生26名が本学を卒業・修了しました※。

本来であれば、卒業生・修了生全員に一人ずつ学長より学位記が手渡されますが、感染症拡大防止のために各学科・研究科の代表に学位記が手渡されました。

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、参列者を限定(新入生と教職員のみ)するとともに、密集防止のために3回に分けて行われました。式典の模様は、保護者の皆様や関係者の皆様にご覧いただけるようライブ中継およびオンデマンド配信を行いました。

西宮市大学交流センター開設・西宮市大学交流協議会20周年記念座談会に本学学生が参加しました

西宮市大学交流センター開設・西宮市大学交流協議会(本学を含む市内10大学で構成)設立20周年を記念する座談会「学生から見た、学びやすい、暮らしやすいまち～地域との関わりから考える～」が昨年11月に開催されました。本学からも学生1名が参加し、他大学の学生とともに石井登志郎 西宮市長と様々なテーマで語り合いの場を持つことができました。QRコードから動画をご覧いただけます。

「小規模だが評価できる大学」ランキングで近畿1位に！

1位	神戸女学院大学
2位	京都工芸繊維大学
	神戸海星女子学院大学
4位	畿央大学
5位	奈良女子大学
	甲南大学
7位	福知山公立大学
	追手門学院大学
	神戸親和女子大学
10位	滋賀大学
	大阪工業大学

大学通信が発表した「小規模だが評価できる大学(近畿編)」ランキングで、本学が1位になりました。

本ランキングは、全国の進学校2,000校の進路指導教諭にアンケートを行った結果で、本学は昨年よりも大幅にランクを上げました。

2021年度 公認心理師・臨床心理士資格試験の合格率が100%

2021年度の本学の大学院修了生6名の全員が「公認心理師」「臨床心理士」に合格しました！

4年間を学部で学んだ後、2年間の大学院での研修・科目履修を経て、2021年秋に両資格の資格試験がありましたが、全員が合格するという喜ばしい結果となりました。

有資格者として、心理職のキャリアはここからスタートとなりますが、教育・医療・福祉等多様な領域での専門職としての活躍を応援しています。

● 本誌へのご意見、お問い合わせ：神戸女学院大学広報委員会　〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1／E-mail　kckoho@mail.kobe-c.ac.jp
● 取材に際しては、感染予防策を最大限に講じた上で実施いたしました。

●神戸女学院大学広報委員会　〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1
●E-mail　kckoho@mail.kobe-c.ac.jp　https://www.kobe-c.ac.jp/
神戸女学院大学